



# Oasis meets Books

オアシス・ミーツ・ブックス

本のあるオアシス 本のある人生

2018年10月 vol.3

秋の夜長、いかがお過ごしでしょうか(^^)

10月初旬には、オアシス文庫に新刊が入ります。新生「ヘルプマン」、最近、特集も多く組まれている「新考伊能忠敬 九十九里から大利根への軌跡」、「ドビュッシーはワインを美味しくするか?」の音楽効果など。是非、手にとってご覧ください。

## 火の粉 / 栗井 祐介

ヘルパーステーション オアシスながよし / 管理者 熊野 佳子



この本を読むきっかけは、友人からの勧めで借りた事でした。刊行されたのが2003年なので読んだのは10年以上前です。とても面白かったので友人に返した後、古本屋で買い直したぐらいです。その後も色々な本を手に取りましたがこの本が一番印象に残っています。



内容は、元裁判官の家の隣にかつて無罪判決を下した男が引っ越して来たのをきっかけに、色々な事件が起こるサスペンスです。ドキドキ感いっぱい、犯人が近づいているのを気付かない主人公に対して早く逃げてと思わず声を出してしまいそうになるぐらいその世界に入り込んでしまいます。普段、本を読まない息子2人もこの本は苦もなく読んでしまいました。先が気になるのでどんどん読み進められます。皆さんも機会があれば是非手に取ってみて下さい。

・次回⇒ヘルパーステーション オアシスながよし / サービス提供責任者 松田 晶子

## 日本アルプスの登山と探検 / ウォルター・ウェストン

老健 オアシス リハビリテーション科 / 科長 大谷 直寛



ウォルター・ウェストンはイギリス人宣教師で、明治期に三度日本に長期滞在し、その間に各地で登山しました。彼はその時の紀行文を1896年



「日本アルプスの登山と探検」と題してイギリスで刊行し世界に紹介しました。また日本における山岳会設立とその後の登山の普及にも貢献したことで有名です。

私自身、21歳より登山を趣味とし、新田次郎を代表とする古今の山岳小説を読み漁りましたが、フィクションでもあり、リアルさに欠けていました。それよりも古い時代ですが、探検的要素がまだあった頃の紀行文に、自分が実際に登った色々な場面と重ね合わせることができました。

登山そのものには時代を共有できる何かがあるのだと思います。今は登山することも少なくなりましたが、この本を含め、日本の登山の先駆者たちが著した本を読んで、時々空想的に登山しています。

・次回⇒老健 オアシス リハビリテーション科 / 作業療法士 松本 由貴

## Kansai Walker (関西ウォーカー) / 角川書店

デイサービス オアシス長瀬 / 柔道整復師 竹内 伸吾



関西人なら知らない人はいないと言っても過言ではない雑誌だと思えます！もともとは東京ウォーカーの姉妹誌として創刊され、月に2回発行されています。販売エリアは大阪府、京都府、兵庫県、奈良県、和歌山県、滋賀県で販売しているようです。その他の地域でも大型書店で購入できるみたいです。関西以外で親戚がいる方は「大型書店に売っているよ!」と教える価値がある雑誌だと思えます!!



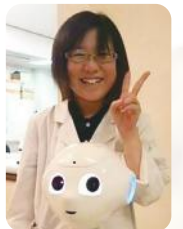
デイサービスオアシス長瀬でも実は月に2回必ず買っています。ご利用者様にも大好評で、1日でも買うのが遅れると「まだ、関西ウォーカー買ってないの? 今から買いに行ってください!」と言われるほどです(汗)

内容は関西の観光名所や新しくOPENしたお店の情報などが掲載されている他、最新の映画情報や新聞を取っていない方にはありがたい番組欄があります! コンビニにも売っていますので是非、読んでみてください!!

・次回⇒デイサービス オアシス長瀬 / 管理者 川邊 啓史

## だるまさんが / かがくいひろし

老健 オアシス 栄養課 / 管理栄養士 石賀 裕子



『だるまさんが』のシリーズは3作あり、『だるまさんが』、『だるまさんの』、『だるまさんと』の3冊の絵本のことを指します。

2008年1月に『だるまさんが』が発行され、現在までに3作で累計265万部も発行されているそうです。その中でも私のおすすめは『だるまさんが』です。



内容は『だるまさんが転んだ』の遊びが基になっています。だるまさんが『どてつ』と転んだり、『ぶしゅー』と空気が抜けたり、『びろーん』と伸びたり。とてもかわいらしい動きをするので、読んでいる大人も微笑んでしまう程です。初めての本にピッタリのかわいらしい絵本です。

・次回⇒特養 オアシス寿安 地域連携課 / 相談員 加藤 亮太

大往生したけりや医療とかかわるな 自然死のすすめ / 中村 仁一

老健 オアシス デイケア・ショート / 生活相談員 山下 陽平



この本は僕が大学時代に読んだことがあり、大学時代に読んだ時と今読み返してみるとまた違った見方ができ、それと同時に考えさせられました。今回はそんな作品をご紹介します。



「現代人は医療に期待しすぎである。老いた人が病気を完治させることは基本的にはできない。」との主張が繰り返されます。治る見込みがないのに全身にパイプをつながれて延命措置を受けることが果たして幸せなのか。従来の考え方を覆す内容です。

医療がさらに発達して、ガンもころっと治ってしまう時代がもしきたら来るのかもしれませんが。でもそれはしばらく先のこと。その前に自分の祖父母や両親を看取ることになるでしょう。絶対に逃げてはいけないテーマなのだと思います。できるだけ多くの人に読んでほしい、そんな作品です。

・次回⇒老健 オアシス デイケア・ロング / 介護士 永田 真実

プロジェクトX 挑戦者たち / NHK出版

管理本部 総務部 / 課長 青木 秀敏



中島みゆきのテーマソングと田口モロロのナレーションで企業戦士の雄志に想いを馳せる。2000年から2005年までNHKで放送されていた番組「プロジェクトX」が私に刷り込んだ産業成長期における日本のイメージは強烈でした。

番組の内容は、いずれも技術立国日本を支えた産業の現場で、人々が達成不可能と思われた目標を成し遂げるまで繰り返し失敗に耐えながら完成にたどり着くまでのストーリーで構成され、それぞれに苦悩がぎっしり詰まっています。



全191話で成功に至る道の険しさ、失敗に次ぐ失敗、挫折の先に見出した一縷の望みにより開けた可能性が、現在の私たちの便利な生活を支えていることを痛切に訴えかけてきます。

ノベライズ化され電子書籍でリリースされたこの「プロジェクトX」は、テレビ映像による視覚、聴覚への直接的な伝達ではなく、文字を読むことにより自然と人の思考回路にその紆余曲折を再現し、打開策の模索を強く訴求し、いつの間にか読む者が当事者にすり替わるような感覚があります。

日本人という民族がその地味ながら粘り強く実直な性格でもたらした結果、より世界を大きく変えたことに改めて誇りを感じさせてくれる物語の数々です。

・次回⇒グループホーム オアシス平野 / 介護士 丹野 敏博

POUPELLE CHIMNEY TOWN えんとつ町のプペル / 西野 亮廣

デイサービス オアシスきずり / 相談員 勝本 康江



この絵本は前評判をテレビで知り、興味を持ちました。表紙から細かい絵にビックリでした。内容と絵のギャップを自分で作ってしまっていました。絵がきれいなので、暗くなくてほのぼの出来る内容と思込んでいましたが、現実引き戻される感覚でした。いきなり空を飛び配送する人が心臓を誤って落とす・・・から始まって。



私は読んでいて、少年のいじめられたくない気持ちもある中に、せつなく出会った友達への優しさが勝る勇気に嬉しくなりました。人は弱い生き物なので、いじめられるとわかりながらも友達を見捨てずに自分の正しいと思う気持ちを通す。それは、少年のお父さんの気持ちから受け継いでいた勇気で、最後には嘘つき呼ばわりされていたお父さんのお話が本当であった事やまさかの結末に涙が出ました。皆さんも一度は覗いてみて下さい。

・次回⇒デイサービス オアシスきずり / 介護士 村井 亮介

オアシス文庫 recommend



蔵書ご案内

カズオ・イシグロの「わたしを離さないで」をご紹介します。これから読もうとしている方に、ましてやSFやミステリーで「ネタばらし」は御法度かとは思いますが、少しだけ。というのは、小説の途中まではやや退屈かも?(笑)でも、最後まで読んでください。

イギリスの片田舎風の景色、時代も少し昔のような・・・でも、この世界では[臓器提供]だけを目的としたクローンの子供たちが施設で育てられています。この事実が衝撃的ではなく、ふっと当然のこのように小説の中盤で登場します。1度の臓器提供で亡くなってしまふ者、「名誉」と褒めたたえられて4度も提供させられる者、心と身体を削って「使命を果たす」若者たち(長く生きることはない)。

反乱も起こさず逃亡もせず、自殺もしない。そんな主人公たちがたった1つの望みを叶えるために、ある「噂」の真相を確かめに行きます・・・

「臓器提供される」側の人間がどう思っているのかは殆ど描かれていませんが、芸術的な才能を持つことを奨励され感受性豊かに育つクローンの子供たち、でも、ごく普通の子供たちです。生費のように臓器提供させる世界がじわじわ恐ろしいです。

老健入り口の書棚「オアシス文庫」から貸し出しできます▶



編集後記

「読書の秋」ですね。

この言葉の由来をご存知でしょうか。

1つめの由来は、学問の大切さを詠んだ漢詩の一節「灯火親しむべし」、

これは「涼しく夜の長い秋は灯火の下で読書するのに適している」という意味です。それを夏目漱石が小説「三四郎」の中で取り上げたことから、秋は読書に適しているということが広まった、とのこと。

2つめは大正時代に始まった「読書週間」、最初は「図書週間」と呼び図書館事業の宣伝と発展のために日本図書館協会が始めました。現在は文化の日の前後2週間が読書週間であり、図書館では色々な催しも行われるようです。

オアシスの図書コーナーもぜひ活用ください。

